

巻頭言

養成大学院の視点から見た臨床心理士の特色



鳴門教育大学

学長 山下一夫

二つの資格

昨年(2015年、平成27年9月)「公認心理師法」が公布され、遅くとも来年の上半期までにはカリキュラムが明らかになるものと思われます。「公認心理師」資格を取れば「臨床心理士」資格はいらないという人は、どれほどいるのでしょうか。あるいは、「臨床心理士」資格だけでよく「公認心理師」資格はいらないという人も、どれほどいるのでしょうか。

今のところ、両方の資格を持ちたいという人が多いのではないのでしょうか。「臨床心理士」「臨床心理学」。これらの言葉に自分なりの意味を込め、そして思いがこもっている臨床心理士は少なくないでしょう。まさに、「臨床心理士」であることが、自らのアイデンティティに大きな位置を占めているのです。

また、大学においても、臨床心理士を養成する指定大学院と専門職大学院の多くが、臨床心理士と公認心理師の両者を養成したいと考えているようです。

もちろん、公認心理師のカリキュラムが明確になり、さらに年月が経過しその実態が明らかになるにつれ、個人レベルでも大学レベルでも、この二つの資格に対する考え方や対応に変化が見られることでしょう。

しかし、この2資格は重なり合うところが

大きいと思われませんが、お互いに特色や独自性があり、共存することによって補い合うことができる、と私は思っています。

養成・採用・研修

ところで、それぞれの国立大学は強み・特色・魅力を打ち出すための改革を強く求められており、特に教員養成系の国立大学・学部は改組をとまなう改革を求められています。また、教員の資質能力の向上のため、教育委員会と大学等は連携協力し、教員の養成・採用・研修を通じた改革も求められています。

本稿では、教員を養成する大学のあり方を参考に、臨床心理士を養成する大学院の視点から、臨床心理士の特色と独自性について述べるとともに、日本臨床心理士資格認定協会に期待することも述べたいと思います。

大学院レベル

日本と世界の教師教育について、学校教育学の佐藤 学先生の著書(2015)をもとにまとめると以下ようになります。日本では、第二次世界大戦前の師範学校(おおよそ高校・短大レベル)から、戦後一挙に大学レベルへと上がり、1970年代まで日本の教師の教育水準は

世界一高かったのです。しかし、1970年代に欧米諸国のほぼすべてとアジア諸国が、大学における教員養成を実現し、さらに1980年代以降、大学院レベルへの教師教育のアップグレードが世界各国において加速度的に進行するのに対し、日本の教師教育の高度化と専門職化は遅れ、その国際的な地位は世界一から大きく転落してしまいました。

例えば、フランスでは1980年代後半以降、教員の学歴水準向上に向けた改革が段階的に行われ、2005年には教員はすべて修士号取得者となりました(藤井, 2016)。日本でも、国や自治体は教師教育の修士レベル化を推し進めようとしていますが、修士資格者に対する十分な優遇措置がないこともあり、なかなか進展していません。

一方、臨床心理士の受験資格が大学院修士レベルであることは、非常に大きな意義があります。高度な専門職業人としての臨床心理士を養成するための教育水準として修士レベルであることは最低水準であり、諸外国の臨床心理職の資格基準も同程度以上です。

臨床心理学は基礎的心理学の応用分野ではない

1987年(昭和62年)、東京大学の村瀬孝雄先生が、名古屋大学、広島大学、九州大学、京都大学に呼びかけられ、大学院における臨床心理士養成のためのカリキュラムについて意見交換の会議が開かれたことがあります。田畑 治先生、鑓幹八郎先生、村山正治先生、そして私の5人が参加しました。ちなみに、1988年12月に第1号の臨床心理士が誕生しています。

村瀬先生は、この年出版された『臨床心理学』のなかで、「臨床心理学は何よりも、実践の学である。……臨床心理学を『応用』の学であるという人々の多くは、『基礎』的な

心理学の知見を、現実の要請に役立つように『応用』する分野というふうに考えている。しかし実際には、こういう例はむしろ少なく、歴史的にも、臨床心理学的な課題(たとえば、神経症)を解決するための思索や工夫が、やがて洗練され体系化されて独自の技法の確立やその基盤としての人格理論の提示という過程をとることが多かった。代表的な人格理論のほとんどが、臨床心理学的な経験と必要性から生まれたという事実は、基礎から応用へといった古い考え方が、しばしば現実には合わないものであることを実証している。……臨床心理学を学ぶ者は、理論や厳密な実証性と経験や主観との間の複雑な関係に身を投じてゆく覚悟が求められる」と述べておられますが、集まった他の4人も全く同じ考えだったように思います。

そして、大学院の有料の相談室で事例を担当しスーパーヴィジョンを受けること、ケースカンファレンスをカリキュラムの中核の一つとして位置づけることなどが、話し合われました。

臨床心理士としての資質

大学院での2年間、さらには大学を含めて6年間、臨床心理士になるために長い期間かと言うと決してそうではなく、むしろ短い、と多くの方が思っておられることでしょう。

臨床心理士に求められる専門業務は、言うまでもありませんが、臨床心理査定、臨床心理面接、臨床心理的地域援助、臨床心理学的研究です。面接技法は、精神分析的療法、クライアント中心療法、認知行動療法を始め、遊戯療法、家族療法などなど。そして、臨床心理士は汎用性のある資格として、医療、福祉、教育、発達、司法、産業、私設心理相談など幅広い職域で活躍しています。さらに、大学院を修了し臨床心理士の資格を得た後

も、専門的な経験や研鑽を積むとともに、対人関係の職業人として人間性や人間的な器が問われてきます。

これだけ盛りだくさんの内容をいかに教えるか難しい問題ですが、次の三つの資質を身につけるように、教員同士で教育方針を共有していることは大切だと思います。一つ目は、相談者の害にならないようにする倫理観と専門的な力量。二つ目は、社会のなかで生きていく相談者と関わるための共感性と社会性。三つ目は、自らが高度専門職業人として学び続けようとする謙虚さと意欲。

大学院のカリキュラム

本認定協会の常任理事であり広島国際大学長であった上里一郎先生が中心となり、教師教育や医学教育における整備されたカリキュラムを参考にして、一つの療法や一つの職域に偏ることなく、汎用性のある資格として大学院生にどのような能力を身につけさせるのか、そのためにどのような教育をするのか、教育内容をどのように精選するのかなど、現在のカリキュラムを見直し検討する委員会もたれていました。しかし、上里先生が急逝されたため、宙に浮いたままになっています。

それが大変な作業であることは重々承知していますが、認定協会には、新たなモデルとなるカリキュラムを是非開発してもらいたいと思います。

おわりに

臨床心理士を養成する大学院の視点から述べてきましたが、紙幅の関係で、それ以外の特色と独自性と考えられる点を、箇条書きで

次に挙げておきます。

一つは、臨床心理士の資格審査において、多肢選択方式の試験だけでなく、論文試験と面接試験があることです。

もう一つは、学び続ける教員を支えるために研修制度の充実が図られ更新制度が取り入れられているように、臨床心理士も研修制度と更新制度が取り入れられていることです。今後、これらの制度は、医師や看護師の制度も参考にしながら、さらに良いものにする必要があると思います。

最後になりましたが、臨床心理士を支えてくれているのは、何よりもまず相談者の皆さんや国民であり、その方々の信頼をこれからますます得られるように頑張っていきたいと思います。それとともに雇用者である、病院、児童相談所、教育委員会、学校、家庭裁判所、少年鑑別所、自衛隊、企業などの皆さんからますます支持されるように努めましょう。

そして、個々の臨床心理士の努力を支えるシステムの構築のため、日本臨床心理士資格認定協会は、他の団体とも連携し協力関係を築いていくことを願って、筆を擱きたいと思います。

〈文献〉

- 藤井佐知子 (2016)「世界の学校経営最新情報23 フランス②」『日本教育新聞』3月7日
- 文部科学省 (1998)「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について」教育職員養成審議会大学院等特別委員会中間報告
- 文部科学省 (2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について——学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて」中央教育審議会答申第184号
- 村瀬孝雄 (編) (1987)『臨床心理学 (放送大学教材)』放送大学教育振興会
- 佐藤 学 (2015)『専門家として教師を育てる——教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店